

博士論文要約

終末期患者と家族への卓越した看護：一般病棟における患者の意向に沿った支援

長尾幸恵

I. 序論

現在日本では多くの人が一般病棟で死を迎えており、患者が意向に沿った終末期を送るうえで、一般病棟の看護師が担う役割は大きい。先行研究では、急性期患者と終末期患者のケアを同時に行うことの複雑さや、終末期患者や家族とのコミュニケーションの困難さを示す結果が多い。少数ではあるが、小児、在宅、急性期領域において熟練看護師による優れた終末期の看護実践が報告されている。これらをさらに発展させ、一般病棟の熟練看護師のナラティブから、終末期にある患者の経過の文脈のもとに、看護師が患者の意向に沿った終末期をどのように支えているかを解釈することで、一般病棟における終末期患者と家族への卓越した看護実践をよりリアルに描き出せると考えた。

II. 目的

一般病棟における患者の意向に沿った終末期を支える看護実践を熟練看護師のナラティブをもとに記述し、終末期患者と家族への卓越した看護実践を明らかにする。

III. 方法

ナラティブ・アプローチを用いた。初回のインタビューは、患者の意向に沿った終末期への支援として、ある程度詳細な状況を思い起こせる事例を語ってもらい、2回目以降に研究テーマに関連深い場面の状況と、その時々での看護師の知識や思考、感情に焦点を当てて質問し、研究者が十分理解できるまでこの作業を繰り返した。最終的に、参加者の語った内容について研究者による再構成と解釈を提示し、参加者の確認をもって終了とした。

得られたナラティブは、看護実践を主軸とした事例として再構成した。個々の看護実践の具体性と個別性を大切にするため、事例ごとに患者の終末期の経過を通して実践の位置づけや意味を解釈し、卓越した看護実践の内容にテーマをつけた。次に、すべての事例を通して見出された卓越した看護実践を示した。解釈過程では、指導教員よりスーパービジョンを受けた。なお、本研究は、予備研究(承認番号:2014-99)、本研究(承認番号:2015-46)ともに日本赤十字看護大学の研究倫理審査委員会より承認を得て実施した。

IV. 結果

研究参加者は、3か所の急性期病院の一般病棟で、看護管理者および同僚により終末期の看護実践をしていると評価された9名の看護師であった。2014年12月～2016年9月の期間に、一人あたり3回～5回、計133分～339分のインタビューを行った。

A. 終末期患者と家族への看護実践の事例

1. 土居看護師：家族に見守られる最期につなげる

独居を続けてきた80代女性の橋本さんは、心不全の末期にあり自宅への退院を希望した。家族は介護負担感と終末期と思えないことからその意向を受け容れられず、看護チー

ムは家族に対して批判的になっていた。土居看護師は、家族の立場を代弁して看護チームをなだめ、家族との信頼関係を築きながら橋本さんの病状が実感できる場を作った。病状の厳しさに気づき始めた家族へ、橋本さんの意向を外出という形で提案した。提案に応じた家族は、外出を契機に橋本さんのもとを毎日訪れ、橋本さんは自宅ではないものの傍に家族がいる終末期を送った。

2. 小池看護師：父子の時間を紡ぎ出す

80 代男性で独居の牛田さんは、喉頭がんの転移性腸穿孔で緊急入院し、その時点でひとり息子の家に近いホスピスに行くことに決めていた。小池看護師は、牛田さんの意向を確かめ、叶えようと息子に相談したが、協力が得られなかった。度々の相談に、ある時息子は思わず泣き出し、父の死を受け容れ難い気持ちを滲ませた。小池看護師は、牛田さんの意向を強く押し進める引き際を見定め、入院期間の制約の下に牛田さんの次の意向である「この病院で死ぬこと」を叶えようと短期間の自宅退院を提案し、息子に在宅での協力を依頼した。息子の返事はなかったが、牛田さんは亡くなるまでのひと月の間、息子は生活を共にして世話をし、牛田さんは自宅での生活を楽しんだ。

3. 阿部看護師：親子のよい時間を願い、支え続ける

女手一つで息子を育ててきた 70 代の加納さんは、乳がんで入院した。母中心の生活をしてきた息子は、母の病状に怯えていた。阿部看護師は、日々、加納さんと息子が治療に向かえるよう体制を整え、2 年にわたる入退院生活を支えた。阿部看護師は、辛くても化学療法を受け続ける加納さんに、息子と共に真意を尋ねた。入院を続けたい気持ちからと分かり、緩和ケアに移行した。加納さんの痛みの訴えが強まり、「死にたい」と口にする加納さんに息子が怒りで返すという場面があり、阿部看護師は責任を感じ苦悩するが、待っている加納さん親子のケアを続け、看取りを支えた。1 年後に連名の手紙が届き、仕事についている息子の姿があった。

4. 江本看護師：大切なものを見つけ、家族の思い出に刻む

野村さんは 70 代の男性で間質性肺炎の悪化で入院した。会社を経営していた野村さんは厳格さを滲ませ、若い看護師では対応が難しかった。江本看護師は、会話の糸口を探りながら関わり、野村さんがバナナを大切に食べていることに気付いた。会社を引きついだ息子は、依頼されたバナナを届けるが野村さんの気持ちには気付かず、親子の会話は上司と部下といった様子だった。野村さんの亡くなった後、息子は江本看護師に勧められて野村さんの背中を拭き、バナナの話聞き、最期の姿を心に刻み、父の愛情を思い起こした。

5. 藤井看護師：生きる力を支えることに全力を尽くす

60 代で専業主婦の松下さんは、直腸がんで化学療法をしていたが、潰瘍性大腸炎の悪化により DIC を併発した。最初の化学療法時から受け持ちとなった藤井看護師は、松下さんから「孫のために治療を頑張りたい」と聞いていた。重篤な下痢で、頻回にケアを受けることを「情けない」と言う松下さんに、藤井看護師はプライドが傷つかないようケアを工

夫し、懸命に支えた。病状が悪化した松下さんは「もういい」と娘に伝え、藤井看護師は葛藤を覚えながらも松下さんと家族の気持ちに沿った。集中治療室での治療をしないことになり、家族に見守られて翌朝に静かに亡くなった。

6. 千葉看護師：患者の世界に飛び込む

80代の佐伯さんは、妻と二人暮らしで近隣に二人の娘がいた。肺がんの末期で、誤嚥性肺炎で入院し、家族の協力を得て退院すると決めていた。千葉看護師は、佐伯さんの病状では退院は難しいと捉えたが、意向に沿おうと退院調整に取り組んだ。誤嚥して高濃度の酸素が必要になっても意思の揺るがない佐伯さんと妻に、千葉看護師は力強さを感じ見守った。退院前日、佐伯さんは千葉看護師に「また来るわ」と言い涙を流し、千葉看護師は精一杯の気持ちで「また来てください」と応えた。退院した佐伯さんは自宅で穏やかに亡くなった。

7. 望月看護師：家族に託した思いを叶える

吉岡さんは頑張り屋の80代女性で、娘が3人おり、夫の死後、家業を引き継いだ次女夫婦と同居していた。肺がんの脳転移による症状が悪化し、吉岡さんは家で過ごしたかったが次女の介護負担感があり入院した。望月看護師は、医師や家族と調整して吉岡さんの希望する外出ができるようにした。さらに、家族へ看取りまでの経過を説明する機会に、吉岡さんが次女に「最期は頼む」と託していたことや、家族がケアをしたいことを知り、家族と共に吉岡さんのケアを行った。吉岡さんは娘たちに看取られ、最期の化粧をしてもらった。

8. 岡田看護師：治療への希望を否定せずに、病状の追認を待つ

後藤さんは70代半ばの女性で、離婚後に会社を経営して四人の子供を育てた。最新の免疫療法で肺がんの治療を行ったが、脳梗塞を発症し中断した。肺炎で再入院した後藤さんは家族の期待を受けて免疫療法の再開を望んだが、病状は厳しかった。家族は後藤さんが治療への希望を持ちながら家族で過ごすことを望み、外泊をした。岡田看護師は、後藤さんが麻薬の使用や尿道カテーテルの挿入を躊躇する気持ちを大切に、本人の納得を待つよう看護チームに働きかけた。後藤さんは最期には自分の病状を感じていたようだった。

9. 瀬川看護師：患者の周辺を整え、家族が荷を下ろせる状況をつくる

40代前半で男性の渡辺さんは、80代の母と弟夫婦がいた。強い腰痛で受診し、腎盂がんと腰椎転移で緊急入院した。渡辺さんの苦痛は強く、弟からは対応への不満が続き、看護チームは対応に苦慮した。瀬川看護師は、緩和ケアチームへ介入を依頼し、カンファレンスでケアの統一を図った。看護チームは各々が情報を密にして渡辺さんと弟のケアに取り組み、瀬川看護師は弟の不満に前面で対応した。徐々に渡辺さんの疼痛は軽減し、弟は辛い気持ちを看護師に話すようになった。最期は弟が看護師と共にケアを行い、渡辺さんを看取った。

B. 一般病棟における終末期患者と家族への卓越した看護実践の特質

9名の看護師の語りを通じて、次のような卓越した看護実践の特質が見出された。

1. 意向の深い意味を捉える

患者の意向の表面的な理解に満足することなく、看護師はその意味や真意を、タイミングを図りながら探り、奥深くにある患者の気持ちに近づいていた。

2. 家族のありように迫り、患者と家族をつなげる

看護師は、家族が患者の終末期を実感できる場を作り、患者の最期に向かう心の準備を整え、患者と家族の意向のバランスがとれたポイントを探り出し、共に過ごす時間につなげた。

3. 一般病棟の制約と特性をケアに活かす

看護師は、治療の経過を通じて長期に関わってきた患者の姿や家族関係の理解をケアに活かし、一般病棟の制約までもケアに活かす逞しさと患者の意向の真意を実現していた。

4. その人を大切にするケアに挑み続ける

患者の選択を尊重し、傍にすることで苦悩を引き受け、患者の強さを見守り、風格のある姿を家族の心に刻むなど、看護師はその人のありようを大切にするケアを続けていた。

5. 看護チームとしてのケアを実現させる

看護師は看護チームとしてのケアを意識して、周囲の看護師を刺激し、患者と家族への関心を抱かせ、メンバーの力を活かした実践で、チームワークを生み出していた。

V. 考察

看護師は、患者への関心から死に関する会話の難しさを乗り越え、患者の意向の真意を探っており、この理解は、実現の幅を広げよい終末期への方向性を導くものと考えられた。家族に患者の終末期を実感する場を作り、家族の悲嘆の表出を促し、家族を責めずに待つ実践は、家族が患者と共にあろうとする力を引き出していた。家族の気持ちが離れた状態で患者の意向を叶えるよりも、家族が共にあることを重視する実践により、患者と家族の絆が強まり、よい最期につながると見受けられた。本研究で示された卓越した実践は、患者および家族の生き抜こうとする力強い姿を契機に引き出され、その世界に入ることによってケアが生まれていた。

VI. 結論

9名の熟練看護師の語りを終末期患者と家族への看護実践の事例として再構成し、分析、解釈の結果、卓越した看護実践の特質が見出された。看護師は患者の意向あるいはその真意を知ろうと努め、協力が得られない家族の心情や事情を考慮して、受け入れ可能な代替案を提案していた。これにより患者の意向通りではないがそれに近い、時にはそれ以上の終末期を過ごすことにつながっていたことが明らかになった。本研究結果は、ジェネラリストの幅広い経験によって培われた看護実践の豊かさを示すものともいえ、ジェネラリストによる卓越した実践が適切に評価され、その知識や思考を含めた実践を言語化し共有する場を作ることによって、卓越性は伝承されることが考えられる。